HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宮澤賢治とカール・サンドバーグのアメリカ ： 日米の詩人による移民のイメージ
Author(s)	土田, 映子
Relation	国際広報メディア研究科・言語文化部研究叢書55「植民・移民・難民のメディア学」（伊藤章・宮下雅年編）p.135-165
Issue Date	2004-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/8411
Type	book part
File Information	etsuchida.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

宮澤賢治とカール・サンドバーグのアメリカ

日米の詩人による移民のイメージ

土田映子

大正 11（1922）年か、あるいは 12 年のことだっただろうか。岩手県の稗貫（ひえぬき）郡立稗貫農学校[1]の生徒だった川村俊雄は、当時、同校の教師として勤めていた宮澤賢治に、こんな言葉をかけられたことを憶えている。

「おれはアメリカへ行きたいんだが、君は行きませんか」

川村は即座に答えた。

「先生がおいでになるなら、どこへだって一緒に行きます」

「しかし、おれはアメリカへ行って、百姓をするんだよ」

賢治は机の上にアメリカの地図を広げると、農業に適した土地の探し方について説明を始めた。川村は聞きながら、胸に心細さがよぎるのを感じた。貧しい農家に生まれ、進学も一度はあきらめた少年にとって、自分を見出し、農学校への入学のために手を尽くしてくれた恩師の提案となれば、信じてついていこうというのが自然な感情ではあったが、一方で、アメリカ渡航というのはいかにも非現実的な話とも取れた。

「すぐにでも出かけるような気持ちでいた」と川村はその時のことを述懐しているが、賢治の渡米計画が実現することはなかった。宮澤賢治、26 歳の頃

[1] 明治 39（1906）年に花巻市内に設立された蚕業講習所を前身とし、大正 10（1921）年 5 月開校。大正 12 年 4 月に岩手県立に移管され、花巻農学校となる。現・岩手県立花巻農業高等学校。宮澤賢治が教諭として勤務していたのは大正 10 年 12 月から大正 15（1926）年 3 月までの 4 年 4 ヶ月間。

の出来事である。[2]

ちょうどその頃、太平洋を隔てたアメリカ中西部。もう若くはないひとりの詩人が、一冊の童話集を出版した。ジャーナリストとして新聞や雑誌に記事を書きながら詩を発表する生活を続けてきた彼は、そのどちらの分野でも一定の成功を収めていたが、『ルタバガ物語』――スウェーデン蕪(かぶ)の国の物語、と名づけられたその本は、彼の初めての童話集だった。それまで都会の喧騒や戦場のありさまを詳細に描き出した著作で評価を得てきた彼が、摩天楼の背後に広がるアメリカの平原を舞台に綴った数々の物語は、多くの読者の手に渡り、やがて彼を新しい仕事の地平へと導いていくことになる。

詩人の名はカール・サンドバーグ。44 歳の年に訪れた転機だった。

このエッセイは、宮澤賢治とカール・サンドバーグがそれぞれの作品に残したアメリカへの移民のイメージを、両者が生きた時代的・地理的背景と照らし合わせながら読もうとする試みである。文学作品における「移民」のイメージとは、異郷に根を下ろして生活する人々の姿の表現であると同時に、移住するという行為そのものに作者が見出している意味の表現でもある。さらに、アメリカへの移民を描くということには、現実としてのアメリカとつながりながらもそれとは別個の、「アメリカ」という言葉が喚起する印象を表現することも含まれている。こうしたアメリカ移住に対する作者のイメージが形成されるにあたっては、その時代と地域において共有されていた価値観の影響を抜きにして考えることはできない。そこで本稿では、賢治とサンドバーグが作品中に示した「移民」のイメージから、文学作品というメディアにおいて、20 世紀の初めにアメリカへ移住するということにどのような意味が付与されていたのか、そしてそこにはどのような歴史的文脈が作用していたのかを見て行くこととしたい。

賢治とサンドバーグを取り上げたのは、二人には 20 世紀前半に創作活動

[2] 関登久也『新装版　宮沢賢治物語』（学習研究社、1995 年）215－17 頁。原本は『宮沢賢治物語』（岩手日報社、1957 年）。

を行った詩人として、いくつかの共通項を持っているからである。まず、二人はともに日本とアメリカ合衆国のそれぞれで「国民的詩人」としての地位を占めている、あるいは占めていた時代がある。賢治の作品が広く読まれるようになったのは彼の没後であり、一方でサンドバーグは 89 歳までの生涯の後半生をずっと有名人として送ったという違いはあるが、それぞれの国内できわめて広い読者層を得たこと、没後から現在に至るまで新しい読者を獲得し続けていること、国外にも紹介され、ある程度の知名度があることは共通している。また、賢治は日本の東北、サンドバーグはアメリカ中西部の小さな町で生まれ、それぞれの国の文化の中心からは離れた場所を本拠地としており、ともに民衆の視点に立つことを大事にしていた。もっとも重要なのは、賢治は日本の、サンドバーグはアメリカの、ある精神的潮流を代表する役割を与えられてきたということである。その役割のあり方においては、二人の間には違いがあるのだが、その点については追々論じることとする。

I　宮澤賢治の作品が描く「アメリカ」

よく知られているように、宮澤賢治の生涯と作品には、出身地である岩手県の存在が大きく影響を及ぼしている。明治 29（1896）年に岩手県花巻町（現在の花巻市）に生まれた賢治は、その 37 年の生涯の大半を県内で過ごした。地元の小学校を卒業した後は、県立盛岡中学校（現・県立盛岡第一高等学校）と盛岡高等農林学校（現・岩手大学農学部）で青春時代を送り、在学中、また花巻農学校勤務の間に、岩手山や小岩井農場を始めとする県内各地を旅している。賢治の作品中で「イーハトーヴ」[3]と名づけられた世界は、賢治によって解釈され、変容させられた岩手のイメージである。

賢治作品と岩手の風土との関係は、そこから想を得たという言葉では言い尽くせない深さであったことは、童話集『注文の多い料理店』の序文からう

[3] 「イーハトヴ」「イーハトーヴ」「イーハトーヴォ」と変遷をたどっている。童話集『注文の多い料理店』の広告には、「イーハトヴは…ドリームランドとしての日本岩手県である」と記されている。佐藤泰正編『別冊國文學・No.6　宮沢賢治必携』'80 春季号（學燈社、1980 年）64 頁参照。

かがい知ることができる。

> これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。
> ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるへながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたまでです。[4]

賢治の、物語創作に対する姿勢を表す重要な文章とされているこの序文からは、賢治が岩手の風土を物語の材料として使うのではなく、むしろ風土そのものに濾過(ろか)され湧き出してくる土地の記憶の語り部として、風土によって書かされているという実感が読み取れる。この『注文の多い料理店』に収められた「どんぐりと山猫」「月夜のでんしんばしら」などの物語のほか、「ポラーノの広場」「グスコーブドリの伝記」といった有名な作品も、異世界としての岩手・イーハトーヴを舞台としている。賢治とその作品世界を語る時に、イーハトーヴが重要なキーワードとして扱われるのは自然なことだろう。

他方で話題になることが少ないのは、賢治作品に登場する他の土地の名前である。賢治作品の舞台の一般的イメージは、第一には多くの作品における登場人物の名前の欧州風な、あるいは無国籍風な響きから連想される、幻想的パラレル・ワールドであり、第二には「なめとこ山の熊」などで描かれる日本の山村だろう。しかし、これらの幻想世界や山村を舞台とした賢治作品に、実在の土地への言及が現われることがままある。それは、賢治作品の中での、岩手／イーハトーヴと世界の他の土地との関係を示す手がかりであり、また賢治の持っていたその土地についての知識とイメージの表現でもある。それは同時に、賢治が作品を執筆していた時代に日本で入手できたそれらの

[4] 『宮沢賢治全集８』（筑摩書房、1986 年）15 頁。初出は大正 13 年に賢治が自費出版した『イーハトヴ童話　注文の多い料理店』（杜陵出版部・東京光原社、1924 年）。

土地についての情報の反映とも言える。

では、賢治作品において「アメリカ」はどのように現われてくるのだろうか。以下に紹介する３作品は、すべて大正 12 年頃に書かれたと考えられている。ちょうど、賢治が農学校の生徒の前にアメリカの地図を広げ、かの地での農業に思いを馳せていた頃のことである。[5]

１.「虔十公園林」[6]

賢治の数多い物語作品の中で、「銀河鉄道の夜」や「風の又三郎」などには及ばないものの、比較的よく知られている作品である。「雨ニモマケズ」の詩を初め、賢治作品に繰り返し現われる「でくのぼう」による無私の行為を主題としている点で重要とされてきた。

舞台はとある山村。虔十はいつも笑っている、お人好しの若者で、村の子どもたちにもばかにされている。ある年、両親に初めての頼み事として 700 本の杉苗を買ってもらい、それを家の後ろの野原に植えたが、土壌の底が粘土なので８年目になっても９尺までしか成長しない。村人に杉の枝打ちはしないのかと問われ、上の方の枝３、４本を残して払い落とすと、杉の列の下が並木道のようになり、子どもたちが集まって遊ぶようになる。虔十は喜んでそれを毎日見ていたが、隣の敷地に畑を持っている村人の平ニが、畑に影が落ちるから杉を伐れと虔十に難癖をつけに来る。虔十はおびえながらも平二の要求に屈せず、平二にひどく殴られる。これが虔十が生涯でただ一度きり、人に対して逆らった時だった。その年の秋、虔十も平ニもチブスにかかって死ぬ。翌年、村に鉄道が通ると、工場や家が次々に建ち並び、やがてすっかり町になるが、虔十の林は手つかずで残り、子どもたちが集まり続ける。虔十が世を去って 20 年近くが過ぎたある日、「昔のその村から出て今アメリカのある大学の教授になってゐる若い博士」が 15 年ぶりに帰郷する。博士

[5] 異稿「植物医師」は大正 12（1923）年に農学校で演劇として上演。「虔十公園林」と「ビヂテリアン大祭」はともに生前未発表で、現存する原稿が書かれたのが大正 12 年と推定されている。

[6] 『宮沢賢治全集６』（筑摩書房、1986 年）403－412 頁。

は昔の面影を失った故郷の中で、子どもの頃に遊んだ林だけが元のままなのに感動する。虔十の老いた父親が、息子の形見として残していたのだった。博士の提案で、林は「虔十公園林」と名づけられ、保存されることになる。

この短い物語に描かれた 20 数年に及ぶ時間の流れの中で、村は鉄道の停車場が建設されたことを皮切りに、近代化と産業化、都市化の波に洗われて変容していく。鉄道の敷設は 19 世紀の後半から 20 世紀の前半にかけ、世界の各地において、近代的生活の象徴であり、尖兵だった。鉄道は物資の運搬を容易にすることで産業の構造を変化させる力であったと同時に、人の移動を促すものでもあった。虔十の杉林で遊んだ子どもがアメリカに渡り、博士となって帰郷するという設定には、鉄道が通ることによって、この村と「近代」が支配する世界との間の行き来が可能になったことが示唆されている。[7]

村は町へと変化し、「近代」の一部となりつつある。しかし、「近代」のいわば本場、完成形は「アメリカ」なのだ。そのことは、この若い博士が故郷に戻ると、「小学校から頼まれてその講堂でみんなに向ふの国の話を」したこと、そして虔十を記念する公園の提案をするのがこの博士であることに端的に表れている。アメリカにおける博士の体験は、近代化の途上にある故郷の町においては学びの対象となるべきものであり、また、余暇のための公共空間という発想も彼抜きには発生し得なかった。虔十の行いを後世に残す契機として、賢治がアメリカ帰りの博士を登場させたのは、アメリカの持つ近代性を構成する一部として公園に代表される公共の福祉という性格があると、賢治が見なしていたことを示しているだろう。[8]

物語の最後で、かつてその林で遊び、今は各地で活躍する人々からたくさ

---

[7] しかし、鉄道開通以前の村においても「外」の存在は意識されていたことが、虔十の林に遊びに来る子どもたちが杉の下の路を「東京街道ロシヤ街道それから西洋街道といふやうに」名づけていったことから読み取れる。

[8] 賢治のこの認識が当時特別なものではなかったことは、カリフォルニアにおける日本人移民を排斥しようとするアメリカ側の主張に、「日本人は公園を作らない」という文言が含まれていたことから分かる。桑井輝子『外国人をめぐる社会史―近代アメリカと日本人移民―』（雄山閣出版、1995 年）169 頁、『ロサンゼルス・タイムズ』1919 年 9 月 30 日社説を参照。

んの手紙や寄付金が寄せられ、虔十の家族は感涙にむせぶのだが、その中に「海の向ふに小さいながら農園を有ったりしてゐる人」がいる。この「海の向ふ」がどこなのかは書かれていないが、先の農学校の生徒とのエピソードを振り返れば、たとえばカリフォルニアあたりが想定されていたのかも知れない。

2.「ビヂテリアン大祭」[9]

物語の大部分が議論の応酬から成る、異色の作品である。語り手の「私」が、「ニュウファウンドランド島」のヒルテイという山村で行われたビヂテリアン大祭に日本代表として出席し、その時の報告という形を取っている。「ビヂテリアン」とは今日言うところのベジタリアン（vegetarian）だが、作品の初めに、「菜食主義者」と訳するよりも「菜食信者」とした方が実情に合っているという説明があり、この「大祭」も宗教的な国際大会といった趣である。

「私」が会場の村に着くと、「シカゴ畜産組合」と書いた自動車に乗った男たちが、ビヂテリアン排撃のビラを撒いている。教会の庭に天幕を張った会場には、各国から集まった信者が 500 人ほども集まっており、花火が上げられオーケストラの音楽が奏でられる華やかさである。大祭のプログラムには、開会挨拶の後に「論難反駁」というものがあり、「異教徒席」「異派席」と札の出た席に礼装の弁士たちがいる。異教徒（非ビヂテリアン）側は栄養学的見地、人間の解剖学的特徴、人口論、倫理的問題などさまざまな論点からビヂテリアンに対する批判演説を行う。それに対してビヂテリアン側は反論を繰り返し、「私」も論壇に立ったのち、異教徒側が降参して信者席へ移ってくる。最後に残った「異教徒」が、実は「ニュウヨーク座」の喜劇役者であり、この「論難反駁」は大祭の余興であったと種明かしをして、にぎやかな笑いとともに物語は締めくくりとなる。

「菜食信者」たちの集う場所に設定されたカナダの東端、ニューファンドランド島の描写は、イーハトーヴ世界との類似を強く感じさせる。「私」が会場

[9] 『宮沢賢治全集６』60－108 頁。

の村へ向かう途上では、「大西洋がうすくさびたブリキのやうに見え、秋風は白いなみがしらを起し、小さな漁船はたくさんならんで、その中を行」き、また「ひのきの一杯にしげってゐる谷の底に、五つ六つ、白い壁が見えその谷には海が峡湾のやうな風にまっ蒼（さを）に入り込んで」いる。続く物語のところどころでも、「秋の空気はすきとほって水のやう」「清澄なるニュウファウンドランド島」「透明なニュウファウンドランドの九月」といった表現が繰り返され、水も空気もきわめて澄んだ、清涼な北国が舞台であることが強調されている。この地は北米大陸の北東の果て、いわばアメリカ文明の周縁部分であり、日本の周縁に位置する岩手／イーハトーヴとは同等の性質を持つと考えられる。[10]

物語中に名前の出てくる二つのアメリカの都市、シカゴとニューヨークには、それぞれの典型的なイメージから取った役割が与えられている。ビヂテリアンを批判する畜産業者たちがシカゴからやって来るという発想の背景には、シカゴが当時、アメリカの精肉産業の一大中心地だったという事実がある。有名なユニオン家畜置場（Union Stock Yard）が 1865 年に開業してから、精肉産業が他の土地へ移っていく 1930 年頃まで、シカゴは「肉パックの街」（“Packingtown”）とあだ名されるほど食用牛や豚の処理場として知られていた。[11]「シカゴ畜産組合」の人々が菜食主義者たちを非難しにやって来るという「ビヂテリアン大祭」の設定は、当時のアメリカの産業事情を知る者にとっては現実味のあるものだっただろう。また、ニューヨークの名を冠した劇団からやって来る喜劇役者、ジョン・ヒルガードという登場人物には、言うまでもなく、エンターテインメントの中心としてのニューヨークへの憧憬が込められているだろう。きわめて単純化された両都市の役割ではあるが、アメリカの映画や文学、英語に通じ、アメリカでの農業経営を考えた

[10] 賢治はこの作品を「1931 年度極東ビヂテリアン大会見聞録」という題名にして改作を試み、中断しているが、改作版での舞台は岩手の花巻温泉としている。

[11] 都市問題の暴露小説として有名なアプトン・シンクレアの「ジャングル」（Upton Sinclair, *The Jungle*）は、シカゴの精肉生産現場の不衛生ぶりと悲惨を描いた作品である。1906 年の発表。また、シカゴの精肉産業の興亡についてはWilliam Cronon, *Nature's Metropolis: Chicago and the Great West* (New York: W. W. Norton & Company, 1991) の第５章 “Annihilating Space: Meat”, 207－259 頁に詳しい。

賢治の認識が垣間見える設定である。[12]

３．異稿「植物医師」[13]

農学校の生徒たちのために書いた演劇作品である「植物医師」には、大正12（1923）年に上演したものと、それを改稿して大正 13 年に上演したものとの２種類があり、改稿版の台本がこの作品の完成形とされている。初演形では舞台をアメリカにおいているが、改作したものでは盛岡市郊外となっている。初演形の台本は残っていなかったが、出演した農学校生徒が記憶から書き起こし、再現されている。ここでは、こちらの異稿「植物医師」を取り上げる。

時は 1920 年代、アメリカのある小さな町。日本から渡米して植物医師を開業した爾薩待正（にさつたいただし）が主人公である。農民がやって来てトマトの病気について相談するのに対し、爾薩待はいい加減な診断で、虫害だから亜砒酸を撒布するようにと言い、診察料を取る。うまくいったのに味をしめ、次々と計５人の農民から同じ診断で金をせしめるが、トマトが枯れてしまったので農民たちは怒って押しかけ、診断料を返金させる。爾薩待ががっくりしているところへ、貴公子がヤドリ木を持って訪れる。爾薩待はテングス病だと言ってヤドリ木を剪定し、250 ドル吹っかけるが、貴公子は「ただの 250 ドルですか」と支払ってしまう。「すると少し安いのかなあ」と爾薩待が考えていると、貴婦人が現れ、「テリヤ」を診てくれと言う。犬かと思ったところ、ノミの名だった。爾薩待はノミを顕微鏡で診察し、これは「消化不良」で、「有機的に貴女の体と同体をまぬがれません」という理屈で貴婦人の診察料､薬代等で 300 ドルをせしめる。有頂天になっていると、ピストルを持って覆面をした巨漢が登場し、爾薩待に手を上げさせ、札束を奪って逃げてしまう。爾薩待がし

---

[12] 賢治の弟である清六の回想に、賢治が各国の洋画に親しみ、特にチャールズ・チャプリンの作品から影響を受けたとある。宮沢清六『兄のトランク』（ちくま文庫、1991 年）39－51 頁、「映画についての断章」参照。

[13] 『宮沢賢治全集８』579－95 頁。『新装版　宮沢賢治物語』にも、再現者の松田奎介（けいすけ）が語った上演にまつわるエピソードとともに収録されている。320－40 頁。

おれて座り込み、幕となる。[14]

この台本を再現した松田奎介と、爾薩待を演じた川村俊雄によれば、この劇は初め英語で書かれ、賢治は全部英語で上演するつもりであったのが、生徒たちの英語力がそこまでなかったので、ごく一部のセリフ（爾薩待の「カムイン」、巨漢の「ハンド　アップ」など）に英語を使うにとどまったという。テンポの速さ、喜劇調の展開やピストルを持った強盗の登場などには、映画の影響がうかがえる。松田は回想で、外国人らしい身振りや態度を出演者に指導する時の賢治の様子が「いかにも堂に入っているので感心した」と語っている。[15]「植物医師」にまつわるこれらのエピソードからは、賢治がアメリカやそこの人々についてある程度まで具体的な印象を作り上げられるほど、多くの知識を持っていたことが分かる。戦前の日本からアメリカ合衆国本土への移民は、大正年間に最高潮を迎えている。岩手県からの渡米者は都道府県間の比較では少ない数にとどまっているため、賢治の生徒たちを含め周囲の人々にとってアメリカ移住は現実的な選択肢とはならないのが普通だったのだろうが、多くの移民を送り出した地域の人々が目や耳にしたであろう情報を、賢治は積極的に集めた上で渡米の計画を温めていたものと考えられる。

Ⅱ　賢治の時代とアメリカ移民のイメージ

賢治が結局、アメリカ移住の夢をあきらめなければならなかったのは、賢治の個人的な事情によるものだけではなかった。花巻の資産家の長男という世間的立場や家族の反対などの障害とは別に、日本からアメリカ合衆国への移民が禁止されるという事態が起こったからである。1924（大正 13）年、アメリカのクーリッジ大統領政権の下で、いわゆる排日移民法が成立したのだった。「植物医師」初演の翌年のことである。ここでは、この年に至るまで

---

[14] 正稿「植物医師」では、貴公子・貴婦人・ピストルの巨漢は登場せず、農民たちが怒って押しかけたものの、うなだれる爾薩待を許してやるという結末になっている。『宮沢賢治全集８』408－422 頁。

[15] 『新装版　宮沢賢治物語』321 頁。松田は「外国映画なども入っていない時代」としているが、宮澤清六の回想を参照。

の日本からアメリカへの移民に関する状況を振り返るとともに、賢治や同時代の渡米を夢見る人々が得ることのできた情報がどんなものであったかを見てみよう。

１．日本からアメリカ合衆国への移民[16]

近代日本から海外への初めての本格的な移民として記録されるものは、明治元年（1868）年に 150 名がハワイ、40 名がグアムへ渡ったいわゆる「元年者」の渡航である。[17]これはアメリカ人の貿易商の手配による農場労働者としての移民で、半奴隷的な悪待遇で働かされたために、日本のイメージダウンを恐れた日本政府は、いったん一般人の海外渡航を禁止した。政府の管理のもと、1885（明治 17）年から労働者のハワイへの渡航が再開され、一般の渡航の禁止も解除されて、他地域への出国者が増えた。アメリカ本土への日本人の渡航もこの時に始まり、北米西海岸の都市を中心に日本人のコミュニティが育っていった。出稼ぎ労働者に加え、働きながら学ぶ学生移民も 1900 年頃から増加した。しかし、後で述べるように、北米の特定の土地（カリフォルニアのほか、カナダのバンクーバーなど）に日本人移住者が集中したため、これらの土地で日本人排斥運動が起こり、合衆国では 1924 年に日本からの移民は禁止され、カナダへの移民も 1928 年にはわずかな枠を残して禁止されることとなった。1899 年から 1929 年までの 30 年間にアメリカ合衆国本土へ渡った日本人移民は約 87,800 人、ハワイへ渡った者は 16 万 5 千人にのぼった。[18]その後は、ラテンアメリカ諸国、あるいは日本が植民地

---

16 この項目は主に、全米日系人博物館企画／アケミ・キクムラ=ヤノ編『アメリカ大陸日系人百科事典：写真と絵で見る日系人の歴史』小原雅代他訳（明石書店、2002 年）第１章「日本からの移民」・第 10 章「アメリカ合衆国の日系社会と日系人」、粂井輝子『外国人をめぐる社会史―近代アメリカと日本人移民―』（雄山閣出版、1995 年）を参考とした。

17 当時のハワイはまだハワイ王国であったが、経済的にはアメリカに支配されつつあった。ハワイの合衆国への合併は 1898 年、州への昇格は 1959 年。グアムはスペイン領だったのが、1898 年の米西戦争によってアメリカへ譲渡された。1941 年から太平洋戦争終結まで日本統治下。戦後はアメリカの信託統治を経て 1950 年からアメリカ準州。

18 『アメリカ大陸日系人百科事典』411 頁の表より算出。なお、いったんハワイに渡ってからアメリカ本土に入った移民や、出稼ぎ労働者として渡米した者も多いので、この

化した朝鮮半島、樺太、満州といった地域が日本人の移住・入植先となっていく。[19]

明治・大正期の日本人は、どのような情報を受けてアメリカへの移住を決めたのだろうか。当時の言論人や雑誌を主としたマスメディアの議論は、近代化と富国強兵の掛け声の中で、日本の経済活動圏の拡大や国力の強化のため、日本人が積極的に海外へ出ていくべきとするものだった。それは、当時の帝国主義思想の文脈に沿った議論だった。すでに海外に雄飛している中国人や、イギリスを初めヨーロッパ諸国の人々のように、日本人も海外に出ていくことが、国のためでもあり、ひいては個人のためでもあるとする論調が目立った。粂井輝子は、こうした日本の移民・植民論の特徴を、「個人の立身出世と国家の立身出世が同一線上で論じられる」ことだったと指摘している。[20]このような論理が、識者やマスメディアの宣伝を通じて、一般の日本人の思考様式に組み入れられていったことは否定できないだろう。

けれども、他の多くの国々からの移民たちのように、国家の運命よりは個人や家族の経済的事情を好転させるという動機の方が、日本人にとってもはるかに強い渡米決定要因だった。20 世紀初頭の日米の所得格差は 1 対 10 もあった。政府管理下のいわゆる「官約移民」でハワイに渡った労働者が得た賃金の高さが情報として流れたことも、その後に労働移民が続く理由の一つになった。[21]早くも 1880 年代前半からアメリカの案内書が出版され始め、

人数のすべてがアメリカに定着したわけではない。アメリカの統計によれば、1908－24 年の間にアメリカから出国した日本人移民は、入国した日本人移民の 31%を占めると計算されている。『外国人をめぐる社会史―近代アメリカと日本人移民―』23－25 頁。

19 賢治は大正 12（1922）年の夏、樺太へ旅している。前年に書かれた「永訣の朝」はよく知られているように、信仰をともにしていた妹のトシが 24 歳で病死した折の悲しみから書かれた詩群「無声慟哭」の一篇であるが、処女詩集『春と修羅』にはほかに、「オホーツク挽歌」と題した一連の詩も収められている。樺太への旅行は、表向きは農学校の生徒の就職依頼という理由だったが、「オホーツク挽歌」がその旅の風景をうたっていることから分かるように、この旅は妹の魂の行方を探す彷徨でもあった。

20 『外国人をめぐる社会史―近代アメリカと日本人移民―』31 頁。

21 若槻泰雄の研究では、日本の地域によって移民を送り出した割合に偏りがあることについて、移民を多く出している地方は、情報が入手しやすいという条件を備えていたことを指摘している。『外国人をめぐる社会史―近代アメリカと日本人移民―』41－42 頁。

1900 年代には盛んに渡米関連の書籍や雑誌記事が編まれた。これらの出版物からは、アメリカへの移民関連の法律、アメリカの第一次産業の統計、北米西海岸の地誌、日本人居住地の解説、成功した日本人移民の例、失敗した日本人移民の例、日本人排斥運動の状況と分析など、豊富な情報を得ることができた。中には正確でない情報も含まれてはいたものの、渡米を意識して積極的に調べれば、かなり具体的に渡米の仕方やアメリカでの生活について知ることが可能だった。また、情報取得や手続きの面で、アメリカ移住を奨励したり援助したりする組織も 20 世紀初頭にいくつか登場している。[22]

アメリカという国に対する日本人の見方は総じて好意的で、アメリカの掲げる自由･平等の国という理想を額面通りに受けとめている場合が多かった。そのため、アメリカでは日本人も容易に受容され、自由に成功者への道を追求できると喧伝された。

このような、一種の理想世界としてのアメリカのイメージに、賢治が強く惹かれたことは想像に難くない。近代的工業国であると同時に広大な農地・未開墾地を備え、思想的自由を保障する土地という情報は、農業の高等教育を受けて近代科学の力を信じ、かつ、貧しい民衆が大半の中で資産家に生まれたという負い目を持つ賢治にとっては、自分の能力と理想を存分に発揮できるという希望を抱かせるものだっただろう。

また、アメリカ文化の根幹の一つであるキリスト教が、賢治には親しいものであったことも忘れてはならない。賢治の弟である宮澤清六の回想によれば、明治 13（1880）年にバプティスト派の教会が花巻に設立され、賢治の子ども時代には内村鑑三（1861－1930）の弟子２人が花巻に赴任していた。賢治はそのうちの一人に小学２年生の時に教育を受け、長じてからは教会に遊びにいったり内村鑑三の著作を読むなど、アメリカ経由のプロテスタンティズムとは、単に見聞きしたことがあるという以上の関わりを持っていた。そうした経験が、賢治のアメリカへの憧憬をふくらませた面もあったと考えられる。[23]

---

[22] 労働運動家の片山潜が設立した渡米協会などがあった。

[23] 『兄のトランク』244 頁、『別冊國文學・No.6　宮沢賢治必携』65 頁。

しかし、実際のアメリカは自らが掲げる理想の通りではなく、かつ、日本人を含めたアジア人にはその理想の実現に参加する権利をも与えようとしなかったことは、アメリカへ渡った移民たちが直面した現実であった。そのことは報道を通して日本本土にも伝わり、日本人のアメリカ熱を冷え込ませていくのである。

２．アメリカ合衆国の移民政策

よく言われるように、アメリカ合衆国への移民の流入は、アメリカ側へ人を「引き寄せる」（pull）要因と、他の国から人を「押し出す」（push）要因の強弱によって変動してきた。[24]それらの要因には、宗教的なものや政治的なものも少なくなかったが、もっとも影響力が大きかったのは経済的な要因である。アメリカに行った方がよりよい経済的機会を得られるという判断のもとに、さまざまな国の人々が大西洋を、また太平洋を渡った。そうした移民の流れを、アメリカが国の政策として初めて押しとどめようとしたのは、1880 年代のことだった。移民制限政策が取られた背景を簡単に追ってみる。

移民の流入を制限すべきだという議論がアメリカで高まったのは、19 世紀末から、入国してくる移民の質と数に大きな変化が見られたのが直接的な原因である。南北戦争（1861－65 年）以前、農業国家だった当時のアメリカに渡ってきたのは、多くが西・北ヨーロッパから農地を求めてきた人々だった。19 世紀のヨーロッパでは人口の急激な増加が始まり、農地が不足するようになったためである。南北戦争が終わると、合衆国の北部を中心に工業と産業資本が発展し、都市の急成長が始まった。1869 年に初めての大陸横断鉄道が完成し、開拓途上の西部が全国的な経済網に組み込まれたのが、経済発展には重要な出来事の一つだった。西部の農産物と北東部の工業製品の生産はともに 19 世紀後半に増大したが、労働力の需要を満たしたのは多くが移民だった。19 世紀を下るにつれて、都市の労働者の需要が高まり、移民も都市の仕事に就く者が増えた。さらに、蒸気船の性能が向上し、短期間で、し

[24] 粂井輝子はこれらの要因に加え、移民の送り出し国側の引き戻そうとする力（pull back）と、移民の流入国側の押し戻そうとする力（push back）をも考慮することを提言している。『外国人をめぐる社会史―近代アメリカと日本人移民―』12 頁。

かも以前よりも相対的に安くアメリカと他の土地の間を行き来することが可能になった。こうした経済上・交通上の条件の変化と、ヨーロッパ・アジア各国の状況とが要因となって、アメリカに流入する移民の質が変わってきた。南欧、東欧、そしてアジア各国からの移民が増加し、かつ彼らのほとんどが農村部や未開拓地ではなく、都市で低賃金の職に就くようになった。彼ら、いわゆる「新移民」の増加は、アメリカ生まれの人々にとって脅威と感じられた。まず、「新移民」の多くは、「旧移民」と文化的・宗教的にかけ離れており、同化が困難と見られた。[25]さらに、「旧移民」に比べて貧しく、技術や教育も持たない「新移民」は、低い賃金や生活水準に甘んじざるを得なかったため、アメリカ生まれの労働者たちは彼らとの不当な競争を強いられることを恐れた。アジア各国からの移民の場合は、人種的偏見がこれに加わった。「新移民」の大量流入がアメリカ社会を脅かすという世論のもとで、アメリカ政府は、国別に移民を制限するという措置を取った。最初に制限の対象となったのは中国人移民だった。中国からの移民は早くも 1849 年に始まり、多くはカリフォルニアに入ったが、1882 年には連邦政府によって入国を禁止された。日本人移民もアメリカ本土ではカリフォルニアが主な入植地だったが、中国人と同様、偏見と差別にさらされた。1906 年 10 月、サンフランシスコ教育委員会は日本人児童を公立学校から排除し、東洋人学校に隔離すると決議した。日本領事の正式な抗議に続き、日米政府間の交渉が行われ、サンフランシスコ教育委員会の決議を無効とするかわりに日本からの移民を制限する、といういわゆる「紳士協約」が結ばれた。1907 年から翌年にかけてのことである。協約では、次の条件のどれかを満たす者に限って渡米が認められることになった。①領事館発行の在留証明書を持つ再渡航者、②在米在留者の父母・妻・未成年の子ども、③外務省の許可をもつ定住農夫。[26]
「紳士協約」が結ばれた年、当時のセオドア・ローズヴェルト大統領の勧告

[25] 「旧移民」は主としてプロテスタントだったが、「新移民」はカトリック、ギリシア正教会、ユダヤ教徒などだった。

[26]『外国人をめぐる社会史』111 頁。「新移民」に対してしばしば、定着・同化してアメリカに貢献しようとしない出稼ぎ労働者という非難が向けられたため、そうしたカテゴリーに入る入国者を排除したもの。

と議会の決定を受けて、移民調査委員会が発足した。共和党の上院議員に率いられたこの委員会は、数年をかけた調査ののち、移民規制の強化を政府に勧告した。[27]その勧告を受け、1917 年、1921 年、1924 年と 3 度にわたって移民規制法が制定された。その目的は、アジア・東欧・南欧諸国からの新規渡米を禁止・抑制することだった。特に 1924 年の移民法は、「排日移民法」として知られる。この移民法には「市民権を得る資格のない外国人」のアメリカ移住を禁ずる条項が入れられたからである。当時の連邦法ではアジア人は市民権を得ることができず、中国人と他のアジア人はこの時点までにすでにアメリカ移住を禁じられていたから、該当するのは日本人だけだった。一方、ヨーロッパからの移民については、国別の移民人数「割り当て」（クォータ）制が採用され、東欧・南欧からの移民数を絞るように数値が設定された。

こうして、賢治を含め、アメリカへ新規に移住しようとする日本人の希望は叶えられない時代に入ったのである。

Ⅲ　カール・サンドバーグと「シカゴ詩集」

先に触れたように、19・20 世紀の転換期にアメリカへ大挙して押し寄せた移民の波は、アメリカ社会に新たな繁栄とともに混乱をももたらした。都市の建設にも産業の発展にも移民の労働力は必要だったが、その一方で、「新移民」には旧来のアメリカ人から容赦ない偏見の視線が注がれた。都市の貧困層を形成する移民たちのアメリカ社会への寄与を評価するまなざしはまだ少なく、むしろ彼らが都市の諸悪の根源であり、アメリカという国を弱体化させているという声の方が大きい時代だった。

そんな中、移民たちを初めとする貧しい民衆こそがアメリカの主体であると謳った詩人が、カール・サンドバーグだった。ここでは、サンドバーグが「民衆詩人」として認められるまでを追ってみたい。

---

[27] 今日では、移民調査委員会の調査姿勢は異文化に対する偏見に満ちたものであったことが指摘されている。

カール・サンドバーグ（Carl August Sandburg）は、1878 年、アメリカ合衆国イリノイ州の小さな町、ゲールスバーグ（Galesburg）で生まれた。両親はスウェーデンからの移民で、父親は鉄道線路の鍛冶職助手、母親は独身時代にはホテルのメードとして働いていた。アメリカで出会って結婚した二人の間には 7 人の子どもが生まれ、カールはその 2 番目だった。小学校に上がってからはヨーロッパ的響きの強い「カール」という名ではなく、英語圏的な「チャールズ（Charles）」という通称を用いていたが、こうした改名は当時の移民の間では珍しくなかった。

13 歳で学校を出ると、サンドバーグは靴磨きや牛乳配達など、さまざまな労働に従事して数年を過ごした後、渡り労働者として旅に出た。19 歳から 20 歳にかけてのこの時期に、サンドバーグはアメリカ中西部の各地を鉄道で移動し、その道中で民衆の間に伝わる歌の数々を学んだといわれる。1898 年に米西戦争が勃発すると、志願兵として従軍し、プエルトリコに駐屯したが、前線に出ることはないまま除隊となった。復員軍人としての特典で大学入学資格と学費を得たサンドバーグは、故郷のゲールスバーグでロンバード・カレッジ（Lombard College）に入学する。[28]ここで文学を愛好する仲間や師を得たことが、サンドバーグの才能が開花する道筋をつけた。

卒業はしないまま 24 歳で大学を去ったサンドバーグは、詩を書きためては私家版の詩集を出して発表する一方、小さな雑誌や新聞に原稿を書いたり、文学や社会主義運動についての講演をしたりといった仕事で生計を立てる日々を送った。1907 年、29 歳の時に、ウィスコンシン州の社会民主党幹部の目に留まり、党員として活動したほか、ミルウォーキーで同党所属の市長の秘書を務めたりもした。[29]サンドバーグはこの地で社会民主党員のリリアン・スタイケンという女性と出会って結婚し、彼女の勧めで「カール」の名

[28] キリスト教新教ユニヴァーサリスト派の大学で、1930 年に大恐慌の影響で閉校した。

[29] アメリカ社会民主党（Social Democratic Party）は、ユージン・デブス（Eugene Victor Debs, 1855－1926）らによって 1897 年に結成。1901 年に社会労働党（Socialist Labor Party）と合併してアメリカ社会党（Socialist Party of America）になった。国際的な社会主義・労働運動の盛り上がりとともに支持者を増やし、デブスは 1920 年の大統領選挙で約 92 万票を集めるに至ったが、その後の「赤狩り」時代に衰退した。

に戻した。[30]

1912 年、サンドバーグは家計を支える必要からシカゴへ移り、新聞記者として働き始めた。詩の発表は続けていたが、作品が日の目を見るにはさらに２年を要した。シカゴを本拠とする有力詩誌『ポエトリー』（*Poetry: A Magazine of Verse*）に投稿が採用され、ようやく詩人としての本格的なキャリアが始まった。サンドバーグは 36 歳になっていた。この時『ポエトリー』誌 1914 年３月号に掲載された数篇のうちの一篇が、サンドバーグの名を詩壇に知らしめた「シカゴ」（*Chicago*）である。「シカゴ」はサンドバーグの出世作であるだけでなく、アメリカ詩壇における記念碑的作品の一つでもあることから、長くなるが全文を引用してみよう。（日本語訳は安藤一郎による。）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

シカゴ[31]

世界のための豚屠殺者、
機具製作者、小麦の積上げ手、
鉄道の賭博師、全国の貨物取り扱い人。
がみがみ呶鳴（どな）る、ガラガラ声の、喧嘩早い
でっかい肩の都市。

おまえは不埒（ふらち）だとみんなが言う、おれもそうだと思う、おまえの白粉（おしろい）を塗りたくった女たちがガス灯の下で農村の若者をひっぱっているのをおれは見たからだ。
それからおまえはやくざだとみんなが言う、おれはその通りだと答える、や

[30] リリアン・スタイケン（Lilian P. Steichen）は、著名な写真家でニューヨーク近代美術館写真部長となるエドワード・スタイケン（Eduard、のちEdward Steichen）の妹にあたる。サンドバーグは後年、この義兄の伝記を書いている。

[31] カール・サンドバーグ『シカゴ詩集』安藤一郎訳（岩波書店、1957 年）15－17 頁。

たらにピストルをぶっ放す凶漢が人を殺し、また自由になって人を殺しに出かけるのをこの眼で見たからだ。

それからおまえは残酷だとみんなが言う、おれの答えはこうだ――女や子供の顔に無慈悲な飢えのしるしをおれは見た、と。

そしてこう答えてから、このおれの都市を嘲笑する者どもにむき直り、その嘲笑を投げ返して、おれは言うのだ、

ほかにこのように昂然と頭を上げ、活々(いきいき)として粗(あら)っぽく強靭で狡猾なことを誇り顔に歌っている都市があったら、さあ見せてくれ、と。

仕事に仕事を重ねるあくせくとした労苦の中で磁力をおびた罵言を飛ばしながら、ここにちっぽけな弱虫の町々を圧倒して、のっぽの、不敵な強力漢が立っているのだ。

舌なめずりしてまさに飛びかかろうとしている犬のように獰猛(どうもう)で、荒野(あれの)にむかって闘いを挑む野蛮人のように抜け目がない、

頭をむきだしにし、
シャベルをふるい、
粉砕し、
計画し、
築き上げ、ぶちこわし、また築き、

煤煙をかぶり、口じゅう埃だらけ、白い歯をむき出して高々と笑い、

恐ろしい運命の重荷を背負い、青年が笑うように笑い、

敗(ま)けたことを知らない無知な闘士のようにも笑い、

その手首の中には民衆の脈搏、その肋骨の下には民衆の心臓があることを自慢して笑っている、

笑っている！

半ば裸(はだ)かで、汗を流して、豚屠殺者、機具製作者、小麦の積上げ手、鉄道の賭博師で、全国の貨物取り扱い人であることを誇る「若者」の、がみがみ呶鳴る、ガラガラ声の、喧嘩早い笑い声を高々とひびかせて。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「シカゴ」を初め、サンドバーグの詩の多くは、都市労働者の日常や社会的不平等の告発などを俗語を多用した自由詩の形で書き、それは内容の上でも形式の上でも新しかった。19 世紀ヴィクトリア朝期の上品さを重んじる文化の夢から醒めやらない当時のアメリカにおいては、サンドバーグの「シカゴ」は衝撃的な作品だった。シカゴという街の賛歌でありながら、「豚屠殺者」（Hog Butcher）を初めとする労働者の生活を力強くも生々しい表現で描いたことは、多くの読者から「残酷」という抗議を呼び起こし、怒りを表すシカゴ市民も少なくなかった。また、スタイルの面では、俗語は詩という文学の世界にはなじまないとされてきたし、形式は伝統的な韻律体系に従うのが当時の主流だった。サンドバーグの作品群はそうした常識を打ち壊したのである。[32]非難の一方で、保守的な批評家たちもサンドバーグの詩から伝わる力強さを認めずにはいられなかった。サンドバーグはその年の最高の詩に与えられるレヴィンソン賞を受賞した。1916 年に『シカゴ詩集』（*Chicago Poems*）が出版されると、サンドバーグは「アメリカ民衆の詩人」として広い読者を得るようになる。続く数年の間に、サンドバーグは『とうもろこしを剥く人々』（*Cornhuskers*, 1918）、『煙と鋼鉄』（*Smoke and Steel*, 1920）とたて続けに詩集を出版し、時代を代表する詩人としての地位を確立したのだった。

『シカゴ詩集』にはさまざまなプロフィールの労働者たち、特に当時、数多くアメリカの都市で働いていた東欧・南欧からの移民たちが登場する。たとえば、「ローマ人の子」（*Child of the Romans*）という詩では、「イタリー系移民の工夫は鉄路のそばに腰をおろして」、貧しい昼食をあわただしく詰め込むと、長時間の保線作業の仕事に戻る。その線路を走る列車の中では、どこかの金持ちが工夫のものとは比べ物にならない豪華な食事をしている。[33]ま

---

[32] 民衆への共感と自由な表現形式は、しばしばウォルト・ホイットマン（Walt Whitman, 1819－92）に比せられ、文学史的には、サンドバーグはホイットマンの後継者とされることが多い。また、当時イギリスとアメリカの詩人が起こしていたイマジズム運動の影響を受けていると言われる。安藤一郎・岩崎良三訳、世界名詩集 22『サンドバーグ　パウンド』（平凡社、1968 年）229－33 頁参照。

[33] 『シカゴ詩集』40 頁。

た、「魚売り」（*Fish Crier*）という詩では、シカゴのユダヤ人街として知られたマックスウェル・ストリートでユダヤ人の魚売りが生き生きと働くさまをうたっている。[34]出身国は示されていないが、移民の一家の苦労に満ちた年月を描いた「流民」（*Population Drifts*）という詩の中では、彼らが出てきた祖国は「刈りたての干草の匂いと草原の風」という表現で象徴され、一方でアメリカの生活は「ごみため鑵」「刑務所」「製函工場」といった言葉で表されている。[35]移民の多くが、農村地帯から出てアメリカの都市労働に従事した現実を踏まえた作品である。

移民たちは労働に汗を流しながらも、時には余暇を楽しみもする。サンドバーグはそこに人生の真価を感じることもある。「ピクニック・ボート」（*Picnic Boat*）では、ミシガン湖を渡ってシカゴに帰ってきたボートを岸辺から見ている作者の耳に、「帰ってきた者のために奏でるポーランド民謡の真鍮楽器のブーブーいう調子のよい音」が聞こえてくる。[36]また、以下に引く「幸福」（*Happiness*）という詩は、サンドバーグの視点を説明して余りある。それはまた、急速に経済力をつけ、大国として膨張しつつあった当時のアメリカにおいては、決して代表的とはいえないものであっただろう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

幸福[37]

ぼくは人生の意味を教える教授に幸福とは何か教えて下さいと言った。
また幾千という人々の仕事を監督している有名な重役のところへ行った。
彼らはみんな頭をふって、まるでぼくが冗談ごとを言っているかのように微

34 『シカゴ詩集』33 頁。

35 『シカゴ詩集』47－48 頁。

36 『シカゴ詩集』34 頁。

37 『シカゴ詩集』35 頁。作品中の「デプレイン河」（Des Plaines River）はシカゴ市の西側郊外を南北に走る河。

笑を返した。
それから或る日の午後に、ぼくはデプレイン河のほとりをぶらぶら歩いた。そして樹陰(こかげ)で一団のハンガリー人が女や子供といっしょに、ビールの樽をおき、アコーディオンをひいているのを見た。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ⅳ「ルタバガ物語」――幻想のアメリカ

サンドバーグが 1922 年に出版した『ルタバガ物語』（*Rootabaga Stories*）は、自分の子どもたちのために創作した物語をまとめたものである。サンドバーグが出版を決めた背景には、ジャーナリストとしての活動を続けていた彼がヨーロッパで見た第一次世界大戦の惨状や、長女の病などがあったと言われる。[38]サンドバーグが「ルタバガ国」（Rootabaga Country）と名づけた架空の国を舞台にした物語のシリーズは、以後数年にわたって４冊が出版された。
『ルタバガ物語』が成功したので、出版社はサンドバーグに、子ども向けのエイブラハム・リンカンの伝記を書かないかともちかけた。長年リンカンの生涯に関心を抱き続けていたサンドバーグは快諾し、執筆のための取材を重ねるうち、子ども向けの本では書き切れない分量の材料を集め、結局一般向けのリンカンの伝記を書くことになった。それも大部の上下巻である。この伝記『エイブラハム・リンカン：草原時代』（*Abraham Lincoln: The Prairie Years*, 1926）はベストセラーになり、サンドバーグは詩人としてよりむしろリンカンの伝記作家として広く名を知られることとなった。サンドバーグは続編の執筆に 10 年以上の歳月を費やし、完結した４巻本『エイブラハム・リンカン：南北戦争時代』（*Abraham Lincoln: The War Years*, 1939）は、1940 年度のピュリッツアー賞（歴史賞）を受賞した。この頃には往年の戦闘

[38] http://www.english.uiuc.edu/maps/poets/s_z/sandburg/ 参照。アクセス日：2003 年８月 27 日。

的な社会主義思想は影をひそめ、アメリカの国民精神を賛美する姿勢が前面に出るようになっていく。

とはいえ、サンドバーグが「転向」したのかといえば、そうではない。アメリカを民衆の作り上げた国ととらえ、さまざまな出身地から集まった名もなき民の働きを称える視点は終生失われなかった。サンドバーグのそうした姿勢は彼の作品の随所に見出されるが、ここでは、宮澤賢治作品との比較の面からもふさわしいと思われる、『ルタバガ物語』を題材にアメリカと移民のイメージを見ていくことにしよう。

１.「ルタバガ国への脱出」 “How They Broke Away to Go to the Rootabaga Country” [39]

童話集『ルタバガ物語』の最初を飾る作品である。この作品で、物語世界全体のトーンや舞台設定のあらましが提出されている。本稿の初めに触れたように、「ルタバガ」（Rootabaga）とは「スウェーデン蕪（かぶ）」の意味である。意味といい、英語の音の感じといい、「田舎くささ」を喚起する単語が選ばれている点に着目しておきたい。

物語は、主人公一家が住む土地の説明から幕を開ける。一家の主人、オノヨコセ（Gimme the Ax）は、「何もかもが昔からちっとも変わらない家」に住んでいる。子どもが生まれたら、その子が最初にしゃべった言葉を名前にすると決めていたので、息子の名前はチョウダイ（Please Gimme）、娘の名前はキカナイデ（Ax Me No Questions）になる。子どもたちが育つ間も、家はいつも通り、「煙突は屋根の上で煙を吐いているし、ドアはドアノブで開くし、窓は開いてるか閉まってるかだし、おれたちは２階にいるか１階にいるかで」変わらない。ある日、親子３人は、「同じところにいつまでもいるのはたまらない」と、家財を売り払って家を出ていく。駅へ行き、オノヨコセは「切符をください。線路が空に向かって走っていって戻ってこないところまで、線路の終わりのもっと先、四方八方遠くに行けるところまでね」と言い、

[39] Carl Sandburg, *Rootabaga Stories Part One* (San Diego: Harcourt Brace,1922), pp.3－13. 訳は筆者による。以下同じ。

有り金をはたいて切符を買う。親子の乗った列車は線路が空に向かって走っているところを通り過ぎてなお走っていく。珍奇な景色が窓の外に展開する。「風船を摘む人たちの国」。空から細い糸で垂れ下がっている「その夏の風船の実り」、果物だったりパンだったりソーセージだったりする色とりどりの風船を、竹馬に乗って農夫たちが摘んでいる。そして、「サーカスのピエロができるところ」、ここではオーブンからピエロが焼き上がってきて、日に干して息を吹き込むと生命を持って動き出す。その町を過ぎると、オノヨコセは、「次がルタバガ国だよ。いちばん大きな町が、レバーと玉ねぎ町だ（Village of Liver-and-Onions）」と言う。[40]「窓の外を見てごらん。豚がよだれかけをかけていたら、ルタバガ国に入ったということさ」列車は線路がジグザグに走る土地に入り、外には市松模様やら水玉やら縞模様やらのよだれかけをかけた豚が目につくようになる。こうして、一家の乗った列車はルタバガ国の、レバーと玉ねぎ町に到着した。

要約では伝えることができないが、原文は随所に同じフレーズの繰り返しや言葉遊びがちりばめられ、登場人物や土地のネーミングの妙とともに、おかしみとリズム感をかもし出している。この特徴は、「ルタバガ物語」に収められたすべての作品に共通するもので、サンドバーグの詩人としての感覚が生かされている。童話を朗読する時の効果を高めてもいるだろう。

一見、架空の世界を描いた作品だが、宮澤賢治にとってのイーハトーヴと同様、ルタバガ国はサンドバーグの物語世界に投影されたアメリカ中西部である。そのことは、「ルタバガ国でいちばん大きな町、レバーと玉ねぎ町」という命名から読み取れる。アメリカ中西部最大の都市は、言うまでもなくシカゴだが、「シカゴ」という名前の由来は、アメリカ先住民ポワタトミ族の言葉で「野生の玉ねぎの生えるところ」を指す単語というのが通説だからである。[41]「レバー」と一緒にされているのは、先に述べたようにシカゴが精肉

[40] Villageは通常「村」と訳すが、「いちばん大きな町」（the big city）と説明があることと、米語では「自治体」をも指すことから、「町」とした。

[41] Chigagou または Checagou といった記述がある。*Nature's Metropolis*, p.23, pp.393－94.

産業の中心地であったことと、アメリカではレバー料理に玉ねぎを添えるのが一般的であることを引っかけているのだろう。[42]

ルタバガ＝アメリカ中西部のイメージであることを踏まえれば、この作品が、ヨーロッパ、いわゆる「旧世界」から「新世界」たるアメリカへ人々が移住してきた歴史の語り直しであることはすぐに分かるだろう。『ルタバガ物語』の世界は、「何もかもが昔からちっとも変わらない」場所で生き続けることにいたたまれなくなった家族が、すべてを後に残して旅立ち、新天地に到着するというこのエピソードから始まる。サンドバーグは童話の形を借りてアメリカ中西部の民衆史を書いていたといえる。

ルタバガの世界は、アメリカの学校で子どもたちが学ぶ合衆国の歴史――理想の共同体を創設するためにメイフラワー号で大西洋を越えるピューリタンや、独立戦争を戦うジョージ・ワシントンに代表されるイメージとは、一線を画している。それは一言で言えば、農本主義的でありながら外に向かって開かれた世界である。『ルタバガ物語』においては、アメリカの成立史は栄光や神話的オーラをまとった国家建設の物語ではなく、民衆の生活の物語だ。何の英雄性も帯びていない一家族が新しい土地で生活を始めること、それも、ある「田舎」から別の「田舎」へ移動することから始まる物語なのである。ただし、新しい「田舎」では、以前の土地では考えられなかったような出来事が起こり、見たこともなかったような住民たちがあふれている。そこには、「変化」が存在するのだ。オノヨコセの一家は、この「変化」、新世界でのみ可能な一種の奇跡を求めて住み慣れた家と村を去っていくのである。

それは代償を必要とする決断である。現実のアメリカへの移民たちは、出身国とアメリカとの間を行き来する者がかなりおり、何度か出稼ぎをして結局母国に落ち着く場合も少なくなかった。しかし、この物語の中では、オノヨコセは切符売り場の駅員に、「行って戻って来る切符ですか。それとも、行ったきり決して戻って来ない切符ですか？」（強調原文）と尋ねられ、「決して戻って来ない切符」と答える。そして物語の最後に、作者は読者に向かっ

[42] 20 世紀アメリカの一般的食生活については、Irmas S. Rombauer and Marion Rombauer Becker, *Joy of Cooking Vol. 1 & 2* (Bergenfield, NJ: Signet, 1997; 初版 1931)に詳しい。

てこう述べる――「もしあなたがたもルタバガ国へ行くと決めたなら、忘れてはいけないのは、まず、持ち物を全部売ることです…（中略）…売り上げのお金を背負い袋に詰めて、列車の駅へ行って、切符を買うのです」と。ルタバガへ行くことは、それまでの生活の一切を捨てることだった。ここにはサンドバーグの、一度「新世界」に触れてしまえば、物理的には何度「旧世界」との間を往復しようとも、それ以前の精神のありようには戻れないという思いが込められているかのようだ。だからこそ英語の原題には、いかにしてルタバガ国へ「行った」かではなく、“broke away” 「脱出した」かという表現が選ばれたのではないか。「つかまえている力を振り払って逃げ出す」というこの表現は、「旧世界」の磁力の強さとともに、そこから逃げようとする意志の強さがルタバガ国へ行くためには必要であることを言外に示している。

２.「子どもを持つことにした２本の高いビル」 “The Two Skyscrapers Who Decided to Have a Child” [43]

「ルタバガ国への脱出」が、「田舎」としてのアメリカのイメージを描いているとすれば、「子どもを持つことにした２本の高いビル」は、アメリカの「都市」のイメージを背景とした作品である。

舞台は「レバーと玉ねぎ町」。道路を挟んで、２本の高層ビルが建っている。道路は昼間は物を売り買いする人々で賑わっているが、夜になると静かになる。２本のビルは、「山がお互いに話をするのと同じように」言葉を交し合い、夜には互いの方へ身を傾けてささやき合う。片方のビルの屋根には錫（すず）と真鍮（しんちゅう）でできた山羊の像、もう片方のビルの上には同じ素材でできたがちょうの像が据えてある。２本のビルの友だちである北西の風は、遠くからやってきては見聞きした物事を語ったり、山羊とがちょうの像を揺すったりする。２本のビルが、山羊とがちょうの像を吹き飛ばすつもりかと北西の風に尋ねると、風は笑って、そんなことをするのは、「あんたがたを気の毒に思った時だね、運の悪いことにぶつかって、誰かの葬式を出さなきゃならないような

[43] *Rootabaga Stories Part One*, pp.101－105.

ことがあったらね」と答える。時が過ぎ、２本のビルは相談して子どもを持つことにする。同じ場所から動かない自分たちと違い、「子どもは自由でなければ」と決める。やがて２本のビルにさずかった「子ども」は、列車「ゴールデン・スパイク特急（リミテッド）」だった。ルタバガ国でもっとも速いこの列車は、平原を走り抜け、山へも海へも行く列車で、２本のビルは強い子どもをさずかったことを幸せに思い、この子どもに愛情を注ぐ。しかしある日、新聞売りの少年の声が、ゴールデン・スパイク特急が大事故を起こして多くの乗客が命を落としたことを告げる。その日の夕方、町の人々は道路の中央に、山羊とがちょうの像が寄り添って横たわっているのを見る。

簡潔でありながら深い切なさを呼び起こすこの物語には、２種類の景色が描かれていることに注目すべきだろう。一つは、昼間の喧騒と夜の静けさの顔を併せ持つ都会。もう一つは、北西の風が旅をし、山羊の像とがちょうの像がビルの上から見渡しているルタバガ／アメリカ中西部の自然の風景である。「草原の広がりの向こうには銀と水色の湖がまるで青い陶器のお皿のように、曲がりくねった川は銀色の蛇のように朝の太陽の下で光っておりました。」町を取り囲むこの広大な自然の描写は短い物語の中に数度繰り返され、その美しさが結末の悲劇性を一層きわだたせる効果を上げている。

「レバーと玉ねぎ町」は、広大な天地の間でいかにも孤独な存在だ。この物語の中では、特急列車が通っているのだからその先には人の住む土地があるはずにしろ、町の外は手付かずの自然である。この、大地と空、湖の広がりの中に点として存在する都市というイメージは、アメリカ中西部そのものだ。点と点を結んでいるのは鉄道で、孤独な点＝都会は鉄道がなければ他の人間の世界とつながることのできない存在である。「虔十公園林」では、土俗的世界を近代化し、都市へ変化させるものとして登場した列車だが、サンドバーグの物語では都市は所与のもの――初めから「近代」そのものとして存在する。列車はその都市の落とし子であり、都市と都市とを結ぶ血脈として機能している。その意味で、ゴールデン・スパイク特急が「レバーと玉ねぎ町」に建つ高層ビルのカップルの子どもという発想は、表面的な奇想天外さを離れて、ある種「自然」なものとしてサンドバーグのペンから流れ出すのである。

Ⅴ　イーハトーヴとルタバガから見た近代――辺境からのまなざし

宮澤賢治とサンドバーグは、ある因縁で結ばれている。それは、ともに草野心平(1903－1988)によって日本の読者に広く紹介されたという点である。賢治の生前にその作品に注目した数少ない中央の文壇人ということで、心平と賢治との関わりは比較的よく話題にのぼるが、サンドバーグとの関連はサンドバーグ作品の読者が近年の日本では少ないこともあって、心平の蛙の詩に親しんでいる読者にもあまり知られていない事実ではないだろうか。

心平は昭和 52（1977）年に書いたエッセイ「賢治をめぐっての私的回想」の中で、自分の詩人としての出発点について述べている。夭折した兄の遺した短歌や詩を読んだことがきっかけになって、中国・広州での大学生時代に英語詩を多読し、その中でもっとも感動したのがサンドバーグの『シカゴ詩集』『煙と鋼鉄』だという。[44]それから 10 年近く経った昭和６（1931）年、心平は他２人の編者とともに、『アメリカ・プロレタリア詩集』と名づけた翻訳詩集の中でサンドバーグを紹介することになる。[45]

同じエッセイの中で､心平は賢治の作品に出会った時のことを書いている。日本の中学（旧制）の後輩が『春と修羅』を送ってよこし、これを読んだ心平は「衝撃」にうたれる。大正 14（1925）年に帰国すると、主催していた同人誌『銅鑼（どら）』を賢治に送り、同人に加わるよう手紙を書いた。賢治は同人となり、いくつかの作品を誌上に発表することができた。心平と賢治は会う機会はついになかったが、賢治が亡くなるまで書簡の往復は続いた。賢治の没後間もなく、心平は『宮澤賢治追悼』という本を編集・出版し、これがきっかけとなって、数年後に賢治の全集の出版が始まるのである。この全集に

---

44 草野心平「賢治をめぐっての私的回想」『ユリイカ　臨時増刊　総特集　宮澤賢治』第９巻第 10 号（青土社、1977 年）13－14 頁。

45 小野十三郎、萩原恭次郎、草野心平編『アメリカ・プロレタリア詩集』（弾道社、1931 年)。

よって、賢治の作品は本格的に世に知られるに至ったのだった。

草野心平は福島県に生まれ育ち、その詩は、生命力の賛美、庶民的反抗精神といった形容で評価されている。そのことを鑑みれば、ともに国の文化の中心地から遠い土地で生まれ育ち、民衆への共感のまなざしを備えたサンドバーグと賢治の詩に惹かれたことも不思議ではなく、むしろ３人の詩人は同じ波長の音に反応する心の琴線を備えていたと言えるだろう。その共鳴の響きは、それぞれが持つ個性が時代の思潮を通過したところに発生したものだった。

本稿で紹介した物語を賢治とサンドバーグが書いた 20 世紀の初めは、移動する人々の時代であり、また民衆がいわば再発見された時代でもあった。後者から先に述べれば、彼らの時代は社会主義思想と運動がその青春期にあった頃だった。賢治が意識的に社会主義思想を標榜したことはないが、農学校退職後に始めた羅須地人協会の活動が社会主義運動の一環と疑われ、警察が事情聴取したということはあった。サンドバーグはアメリカ社会党の活動に参加し、FBI の危険人物ファイルに入れられたり、ロシアのボルシェビキを支援した疑いをかけられて捜査対象になったことすらあったが、詩人として成功した後は政治活動よりも文学の中に思想を表現する方へ重心を移していった。民衆への共感を具体的な活動に乗せようとすれば、おそらくは意識するとせざるにかかわらず、当時の社会主義運動の方向性に重ならざるを得ない（あるいは、重なっていると周囲からは見える）状況があった。

そして、先に述べたように、産業資本主義の発達によって生活基盤の揺らいだ人々が大量に発生する事態と、鉄道を初めとする移動手段の発達を二大要因として、大勢の人々が海を越えて移住する時代のさなかに二人の詩人はいた。賢治はイーハートーヴ、サンドバーグはルタバガの人々に、この時代を見るまなざしを仮託していたのである。そのまなざしに映った世界は、しかし、きわめて違ったものとなった。賢治のイーハトーヴが、「近代」の存在を明確に認めながらも文化的には中立的な――やや俗な言い方をすれば、「無国籍」的な――イメージであるのに対し、サンドバーグのルタバガは「アメリカ」そのものである。賢治のイーハートーヴは、「ここではない近代」と列車や船によってつながっているのだが、サンドバーグのルタバガは「近代」

であり、そして「近代」以外の文化的基層をいっさいうかがわせないのだ。それは、「アメリカ」こそが「近代」そのものである、ということにほかならない。

社会学者・見田宗介の宮澤賢治論から引用してみよう。見田は、評論家の松本健一が、石川啄木を近代詩人、賢治を現代詩人と分類していることに同意している。見田の解説によれば、啄木は「ふるさと」を出て東京に住み、さらにロンドンやパリといった世界の「都」なるものに憧れ続けた点で、近代青年の心情を代表しているという。一方、賢治は東京へ行ったこともあり、海外への憧れもあったものの、「都」への幻想を自分の創造力の終着駅とはせず、「むしろ垂直に折り返して岩手事態の心象の気圏のうちに、〈イーハトーヴォ〉の夢を設営する。」（強調原文）[46]このことは、賢治とサンドバーグの受容のされ方に決定的な違いをもたらしている。

最初に述べたように、賢治とサンドバーグはそれぞれの国において、「国民的」詩人となった。しかし、賢治の文学世界が、「日本」や現実の「岩手」の地盤をつきぬけた普遍の存在（神話や民話のような）だからこそ日本中で享受されているのに対して、サンドバーグは、国家権力に対しては抵抗の姿勢を保ちつつも、民衆の共同体としてのアメリカ合衆国を賛美する作品を書き続けたことにより、「アメリカの詩人」として親しまれることになったのである。

啄木と違って、サンドバーグには憧れの「都」はない。ルタバガの住民たちは、憧れの土地にすでに住んでしまっているからだ。けれども、松本健一の分類に従えば、サンドバーグは啄木と同じく、近代詩人ということが言えるだろう。それは、『ルタバガ物語』を通したサンドバーグのまなざしが、啄木のように特定の「都」ではないが、にもかかわらず「近代」への憧憬、というより限りない信頼を映しているからである。今日の目で『ルタバガ物語』を読むと、ノスタルジックな雰囲気を強く感じるが、それは、辺境の田舎町

46 見田宗介『宮澤賢治　存在の祭りの中へ』同時代ライブラリー版（岩波書店、1991年、初版 1984 年）273－74 頁。見田は続けて、マスメディアの発達によって文化が同時化し、都市化が全国で進行した現代においては、ふるさと→東京→ロンドンやパリ、といった幻想の基礎は解体されてしまったため、現代の少年や青年が「夢を設営する空間」は、賢治がイーハトーヴとして示したような異次元の空間にしかない、と書いている。

をイメージして書かれた物語だからではおそらく、ない。それは「近代」という思想、そのような辺境の土地にさえ「変化」という奇跡をまんべんなく届けることができるという懐かしい理想へのノスタルジーなのだ。ルタバガには、「近代」がもたらす奇跡を信じて、「旧世界」のすべてを捨てて集まってきた人々――アメリカ人がいるのである。サンドバーグの童話が「アメリカの民話」と呼ばれるゆえんだろう。

そして、特急列車が平原（プレーリー）を縦横に駆け抜ける物語に懐かしさを覚える時、わたしたちは、近代を遠く後ろに置いてきたことに気づくのである。